

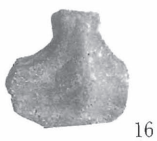
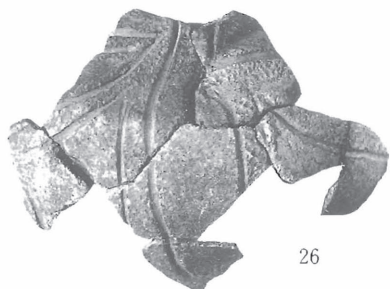
24



25



27



縄文時代後期・関西系土器群の新例

— 市原市武士遺跡の成果から(II) —

加 納 実

1. はじめに

市原市に所在する武士遺跡は、昭和62年度から平成元年度にかけて発掘調査(調査面積48,000㎡)が実施され、平成2年度から整理作業が行われている。調査成果の概要については、当文化財センター刊行の年報No.15(1990)中に記しているの、ここでの重複は避けるが、加曾利E III式期から加曾利B 2式期にかけての450軒にもおよぶ住居跡の検出は、膨大な量におよぶ当該期の遺物(約5,000箱)とともに、注目されるべき性格を多分に有している。

この、武士遺跡の注目されるべき性格の一端については、「縄文時代の掘立柱建物跡」—市原市武士遺跡の成果から—と題し、当文化財センター刊行の研究連絡誌第25号(1989)に資料紹介を行ったことがある。そこでの基本的な立場は、縄文時代の集落の調査に際して留意をうながす点にあった。今回、副題を—市原市武士遺跡の成果から(II)—と題して武士遺跡出土の関西系土器群の資料紹介を行うこととした理由は、考古学的に重要な意味をもつと考えられる資料は速報として公表し、他遺跡での類例を遺漏なく抽出していただきたいと考えたからである。

資料紹介に際しては、整理作業の中途段階にあるという点から、詳細は本報告に委ねるという原則をとる。あくまでも概要の提示に留まらざるを得ないが、資料の重要性に鑑み、関西系土器群の編年学的位置と、そこから導き出される東西土器群の併行関係について、若干の考察を加えておくこととする。

2. 関西系土器群出土遺構・出土状況の概要

武士遺跡出土の関西系土器群は、711号土坑・712号土坑の2基より出土している(第1図)。

ともに、口径と底径に顕著な差のない土坑であるが、底径(口径)に対する残存深度は、1:1を基準に据えると、相反する形態を有する土坑である。

壁面および底面に認められるピットが、土坑に伴うか否かは判然としない。

土坑相互の距離は約70cmときわめて近接し、両者の土坑より出土した関西系土器群には、接合関係が認められる。さらに土坑の設営時期が、ともに称名寺式最終末段階として認識し得ることから、両者は(同時期も含め)きわめて近接した時期に設営された可能性が強いといえよう。

調査時点では、出土遺物のドットマッピングは両土坑とも行っていないが、712号土坑では、13層に分層された覆土のうちの、特定の一層に遺物の集中が認められている。関西系土器群の破片は、総数にして43点であるが、注目すべきは、完存する把手部と、そうでない部分が、完全に分離して出土している点である。

第4図24の左側の把手部・25・27下半の頸部破片を除いた把手部、この計3点のみが、711号土坑から出土しており、他の破片40点はすべて712号土坑から出土している(24の正面部の把手は上部が欠損しているとともに、残存部も接合によるものであり、二片の破片から成るものである)。現段階では、この様相に対応するような特殊な状況は、いわゆる在地的(関東北系)土器群のなかには見だし得ない。ともあれ、この把手部と非把手部の、厳密なまでの土坑に対する処理方法(廃棄・埋納)の差異は、注目に値しよう。

3. 出土土器群の概要

a 在地系(関東北系)土器群

土坑より出土した土器片の総点数は、711号土坑では約830点、712号土坑では約1340点にもおよぶ。

出土土器群の資料提示に際しては、これらのうち、1/3拓影図・実測図で、型式内での細別時期に言及し得る破片を選び出し、さらに、系統的出自を異にする土器群に配慮し、代表的な土器群を提示することとした。出土土器群は、図示不可能な小破片を除けば、従来の型式学的成果からみて、

おおむね単一の時間幅におさまるものである。

711号土坑出土土器群 (第2図)

1は瓢形の注口土器と思われ、内面に明瞭な稜が作出されている。風化により割れくちの磨滅が著しく、器表面での接合は不鮮明であるが、内面では接合関係を認めることができる。正面部は、口縁内面からの縦位の穿孔が、胴部を縦位に分割(懸垂)する2本単位の隆帯間の部位に連続しながら、横位の橋状突起部につらなる。橋状部の両端には円形刺突が施される。左正面部は、縦位の橋状突起が作出され、突起上面部には円形刺突が施され、胴部につらなる下半の部位には、おおむね円形の施文域が作出され、粗雑な円形刺突とC字状の沈線が施される。2は幅広の口縁部無文帯に、J字状の太い隆帯を貼付し、隆帯上にはやはりJ字状の沈線を施す。J字状意匠の両端に、大柄のドーナツ状の円形浮文を貼付する。3・4は、2本単位の沈線でJ字状等の意匠を描出する土器であり、沈線間は無文となる。ともに頸部下でくびれ胴部の張る鉢形土器の胴上半部の破片であり、J字状意匠の起点部にドーナツ状の円形浮文が貼付される。3の地文は縄文であるが、4は網目状擦糸文である。5・6は称名寺II式土器であり、5は胴下半部、6は口縁にきわめて近い部位の破片である。7は格子目状の意匠を有する粗製土器である。

712号土坑出土土器群 (第3図)

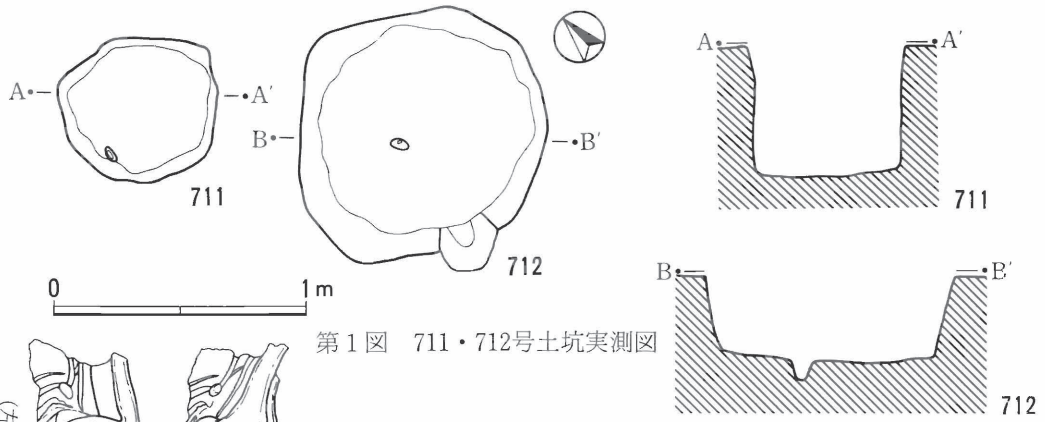
8は平縁の称名寺II式土器であり、明瞭に作出された口縁端部(口唇部)面に円形突起を作出し、上面に円形刺突を施す。この突起は例えば16のような突起の形骸化したような様相を呈している。9~15も称名寺II式土器である。15の意匠内は条線が充填されている。16は口縁端部(口唇部)に円形の突起を作出するもので、突起上面には円形刺突が施される。突起正面上部から口縁無文部には、つまみだしによる縦位の棒状の浮文効果を有している。口縁下は屈曲するようである。17・18は称名寺II式土器に一個認められる、大型把手部である。17の両側面には、穿孔部に沿うように、指圧による渦状の軌跡が認められ、渦状意匠の端部が、集約された粘土により突出するようになる。18は側断面が箱状のもので、側面にドーナツ状の円形浮文が貼付される。19・20は3・4に類似する土器群であり、19の地文は縄文、20は無文であ

る。20の横位区画文上には、いわゆる8字状貼付文が認められる。21は無文地に粗雑な印象の渦巻文が描出されるもので、現段階では類例にとぼしい。ただし本遺跡では、3・4・19・20に類似する土器群の胴部に、21同様の意匠が描出されている例が散見される。22は波頂部にやや捻転気味の橋状把手を有する鉢形土器である。隆帯上には丸先棒状工具による深い刺突列が、正面やや下方より押擦られる。胴部には意匠は描出されず、地文縄文のみとなる。硬質で擦りの弱い縄文(RL)であろうと思われるが、この原体については検討の余地がありそうである。施文方向は縦位と斜位の2方向が認められる。23は7同様、格子目状の意匠を有する粗製土器である。

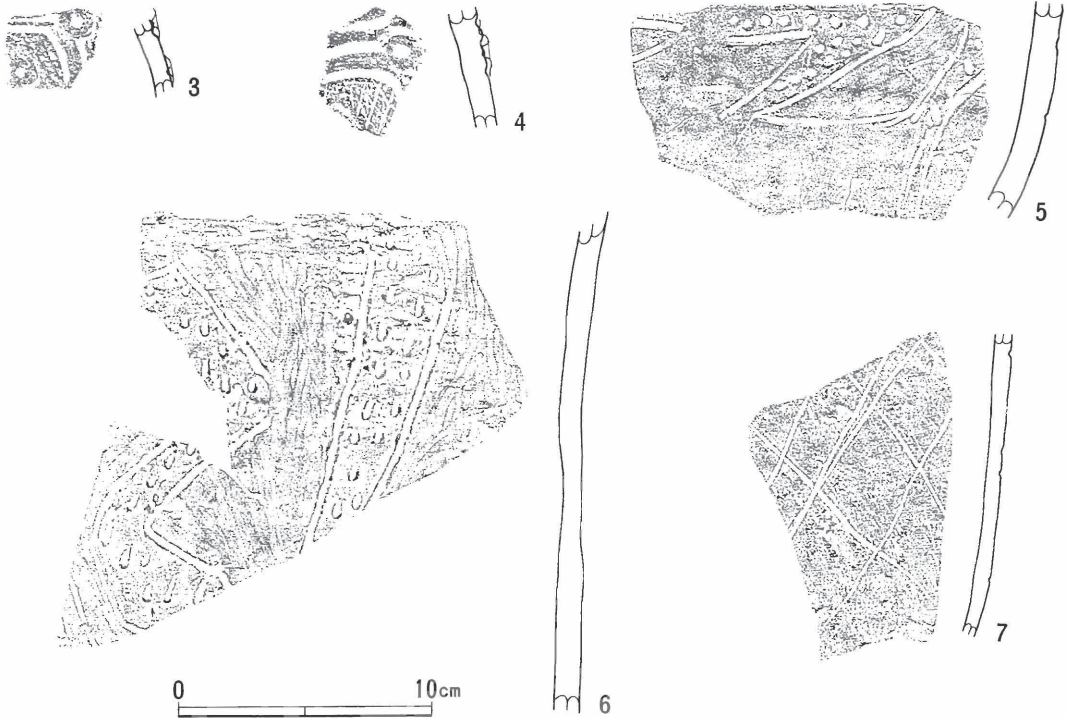
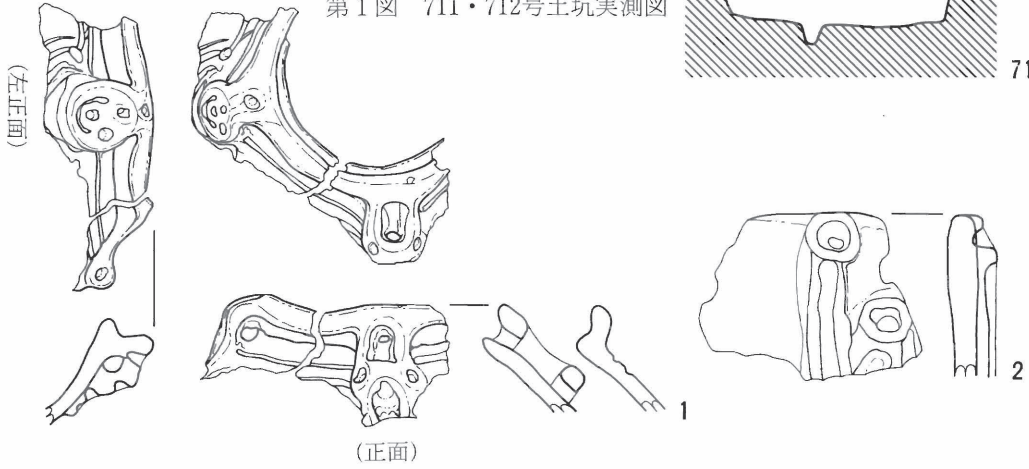
編年学的位置

711・712号土坑から出土した土器群は、おおむね単一の時間幅におさまるものである。5・6・8~15・17・18は、従来の称名寺II式土器に相当し、なかでも5・6は近年の称名寺式土器研究(鈴木1990・石井 1992)に照射させるならば、最終末の第7段階に比定し得るものであろう。1の瓢形注口土器は、近年の注口土器の型式学的分析(鈴木 1992)から、多少の時間的振幅を有しながらも、おおむね称名寺式土器最終末段階に位置づけることができよう。2は東北地方南部に分布する、いわゆる網取I式土器と呼ばれている土器群に類似するものである。おおむね称名寺II式期に併行するととらえられているものである。3・4・19~21は、近年、千葉県鴻ノ巣貝塚(稲村 1989)等で検出例が増加してきた土器群である。頸部で大きくくびれる鉢型土器の胴部上半に、2本~3本単位の描線でJ字状文等の渦巻文系意匠を、相互に連絡するように描出し、意匠の起点部・末端部・アクセント部等に、ドーナツ状の円形浮文を貼付する例が多く、くびれ部の横位区画文上に、8字状貼付文等を貼付する例も多い。稲村氏の「網取式・堀之内系譜の土器群」の「6類」に相当する土器群である。22はいわゆる三十稲場式土器を彷彿とさせる土器群であり、そのなかでもおおむね古い部分に相当しようか。7・23は、東北地方南部の網目状擦糸文を沈線化した粗製土器で、称名寺式期から堀之内I式期に認められるものである。

以上、711・712号出土土器群を概観してみた。



第1图 711·712号土坑实测图



第2图 711号土坑出土土器



第3图 712号土坑出土土器

堀之内1式土器の成立期を挟んだところでの、3・4・19～21のような土器群や称名寺式系土器群の顔つきの変化は、一括資料にとぼしく、いまだ明瞭にとらえられているわけではない。千葉県における堀之内1式土器の規定とも深くかかわるであろうが、711・712号出土土器群の位置づけについて、現段階では、「明瞭な堀之内1式土器を含まない、称名寺式土器最終末段階＝第7段階」としておくことが妥当であると思われる。

b 関西系土器群（第4図）

先述の通り、特殊な出土状態である関西系土器群は、破片総数にして43片にもおよぶ。今回はこのうち、接合後の主要な6片のみを紹介することとする。

出土した土器群はおおむね同一の胎土・焼成を有しており、同一個体であった可能性が強い。類推される完存の形態と破片の数量等から想定するならば、おおむね1個体のうちの6割程度の破片が出土したものと思われる。

全体的には、おそらく5単位の突起を有する深鉢であり、頸部下半ですぼまり、胴部が張る鉢形に似た器形である。帯縄文の幅は、いわゆる中津式土器のものに比べて、幅狭である印象を受ける。縄文原体は単節LRで、充填手法をとる。内屈口縁の屈曲部をまたぐように、帯縄文が施される部分が多く、一部は帯縄文部が完全に内屈面上に施されている。頸部の意匠は、縦位の帯縄文と相互を連絡する斜方向の帯縄文であり、胴部の正文様は大柄のJ字状文であり、相互に斜方向に連絡されるようである。

胎土には、金雲母粒が多く含まれ、石英粒・長石粒も含まれる。特に金雲母粒は、径2mmを超えるかなりの大粒のものも多く、きわめて特徴的な様相として指摘しうる。

色調は、各破片によりばらつきを示すこととなるが、器表面は、灰味がかつたくすんだ明燈褐色のと、黄灰褐色のものがある。器肉はおおむね淡い灰褐色であり、内面は黄灰褐色や黒味の強い黒褐色である。

器表面の調整は、輕易なナデ調整が主体であり、胎土中の鉍物粒の混入ともあわせて、きわめて雑な調整である印象を受ける。内面の調整は、ヘラ状工具による反復調整がみられるものの、細部にわたる入念な調整とはほど遠い。内面には煤の付

着が多く認められる。全体的な焼成の印象は硬質であるものの、表裏一体であるところの個体自体の強度には脆弱な印象がただよう。

ともあれ、関西系土器群は、胎土・色調・焼成、さらには煤の付着等から、前述のいわゆる在地区（関東北系）土器群の特徴である、「茶味がかつた燈褐色系の色調」・「砂粒主体で鉍物粒の混入の少ない胎土」・「軟質な印象の焼成」とは、明瞭に区別し得るものであり、関西系土器群の、小破片までの抽出を容易にしている。経験的にいっところの、搬入品の性格を有するものである。ただし胎土分析は行ってはおらず、型式学的特徴からの地域性の抽出も困難であり、製作地については、現段階では不明である。

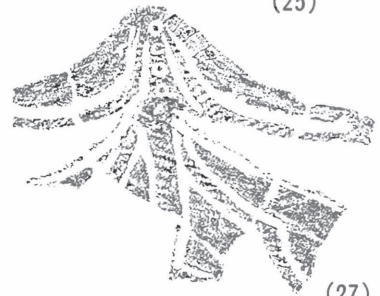
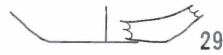
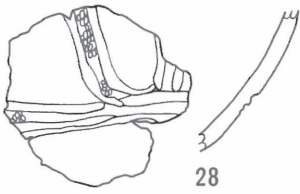
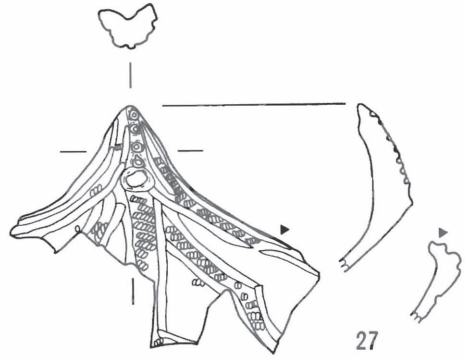
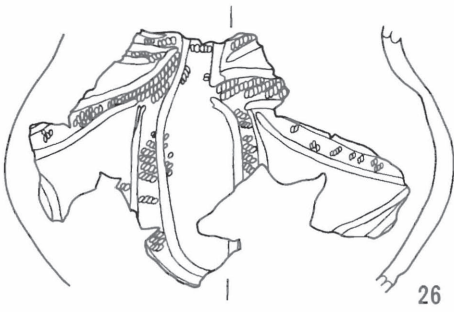
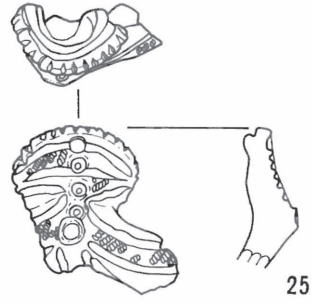
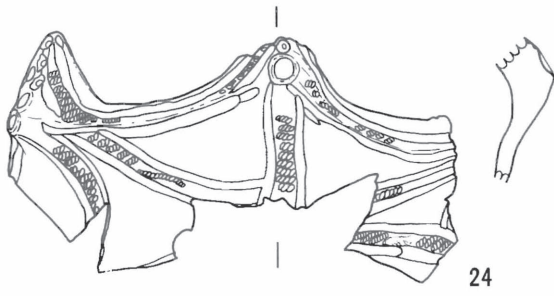
24・27の三角形の突起部の両側面には、口縁内屈面からせりあがるように帯縄文が連続し、帯縄文間には、縦位に円形竹管文が4個施され、円形竹管文下の最突出部には指頭圧により若干の凹部が形成され、結果として浮文的な効果を有しているようでもある。25の突起は、円形竹管文と浮文的な効果については共通するものの、形態は大きく異なる。篋状に弯曲した突起部の上面には単沈線を施し、外面端部には板状工具もしくは半載竹管側面による刻みを有する。25については、胎土・焼成・色調のみから判断するならば、他の破片と同一個体になるものと思われるが、他の突起との著しい形態差からいまだ結論をだせないでいる。

関西系土器群の位置づけ

25の篋状突起は、おそらく近畿地方の中期末の箱状把手（1）からの系譜を連綿とひくものであるろう。箱状把手は、一つの流れとして、三重県東庄内A遺跡の中空円筒状突起（2）のようなものに変遷すると考えられる。

例えば、東庄内A遺跡例の突起正面の縦位の帯縄文部は、武士遺跡例の縦位円形竹管文に相当し、突起を囲うような横位の帯縄文部が、横位の沈線に対応すると思われる。

篋状の形態そのものに注目した場合、中空円筒状突起の内側部の省略による生成を想定し得ると同時に、中実円筒状突起（3）が、口縁部の内弯・内折化に連動し、突起自体が彎曲化し、篋状に変遷することも想定し得る（なお、篋状突起の上面の外面端部の刻みは、中空円筒状突起上面にめぐる刻みや、中実円筒状突起上面の円形刺突文



第4図 関西系土器群

に相当するものとしてとらえ得るであろう)。

また、中空円筒状突起自体が福田K2式土器において、円環部が正面を向き、口縁部の注口状の穿孔として獲得されている例(4)や、中実円筒状突起が縄文部を巻き込むように捻転し(5)、さらに平滑化し、正面を向き口縁部文様として獲得されている例(6)が、中津式土器終末段階を中心に多く認められる。

以上のことから、武士遺跡例の25については、中津式期から福田K2式期にかけての、円筒状突起の変遷のなかでの位置づけが可能であろう。

ただし、福井県北寺遺跡では、武士遺跡例に酷似した意匠を中空円筒状突起に施す例(7)があり、突起の変遷については、地域性も含め、単系的に理解し得ないようである(8)。

24・27に示された正面観が三角形の突起は、やはり、近畿地方中期末の箱状把手の系譜をひく可能性もあろうが(9)、時間的に両者を結びつける資料にとぼしいが故に、その可能性はきわめて低いと思われる。やはり25同様、口縁部の内弯・内折化に連動し、波状口縁の波頂部や小突起が彎曲化し、当該突起が生成することも想定し得る。

24・27例の突起で注目すべき点は、突起両側面に帯縄文がせりあがるように施されることであろう

(10)。これについては、後述する口縁部形態の生成に関する部分でも触れるが、中期末の箱状把手両側面の方形区画文系の意匠は、中津式段階では、安定した帯縄文へ変遷し、突起両側面から口縁端部を巡るように施されることとなる。ただし、箱状把手起源の“突起両側面を連携するような内折系口縁部形態”は、中津式期全般にわたって、その形態の残存をとらえるにはいたってはいない。むしろ趨勢としては、内折口縁と内折面に施される帯縄文は、やや内弯する肥厚系の口縁と口縁端部の帯縄文に変化し、口縁端部の帯縄文の省略化傾向のなかで、消滅していくと思われる(11)。このような視点に立脚するならば、武士遺跡例の突起両側面の帯縄文のせりあがりの系譜を単系的に理解するのは困難であり、現段階では、中津式土器以来の、突起両側面の処理の、終末的な様相の可能性を指摘し得るに留まる(12)。

26の胴部主文様である大柄のJ字状文の成立は、このJ字状文自体が、横位に区画する帯縄文下に付着するのではなく、横位区画文自体がJ字状文

を描出する様相がうかがえ、中津式土器の胴部下半の横位区画文+渦巻文(J字状文)構成の、渦巻文部の反転したものとしてとらえられる。また、底部付近まで主文様が垂下・拡大していること、帯縄文の幅が狭く、明瞭な一筆書きの手法をとらないことから、福田K2式土器に近接する要素が認められ、中津式土器のなかでも新しい様相を示しているものととらえることができよう(13)。

以上、武士遺跡711・712号土坑より出土した関西系土器群は、現段階では中津式土器の新しい部分に位置づけることができよう。具体的に類似例を求めるならば、おそらく島遺跡例(第5図19/久保1983・27頁挿図15 167)が挙げられよう。ここでいう中津式土器の新しい部分とは、福田K2式土器の規定にも絡んでくるが、おおむね旧来の中津III式土器(泉 玉田1986)、近年の(玉田1989)の福田KII式古段階や、(千葉1992)の福田K2式第1段階に相当する。

4. 東西土器群の併行関係について(第5図)

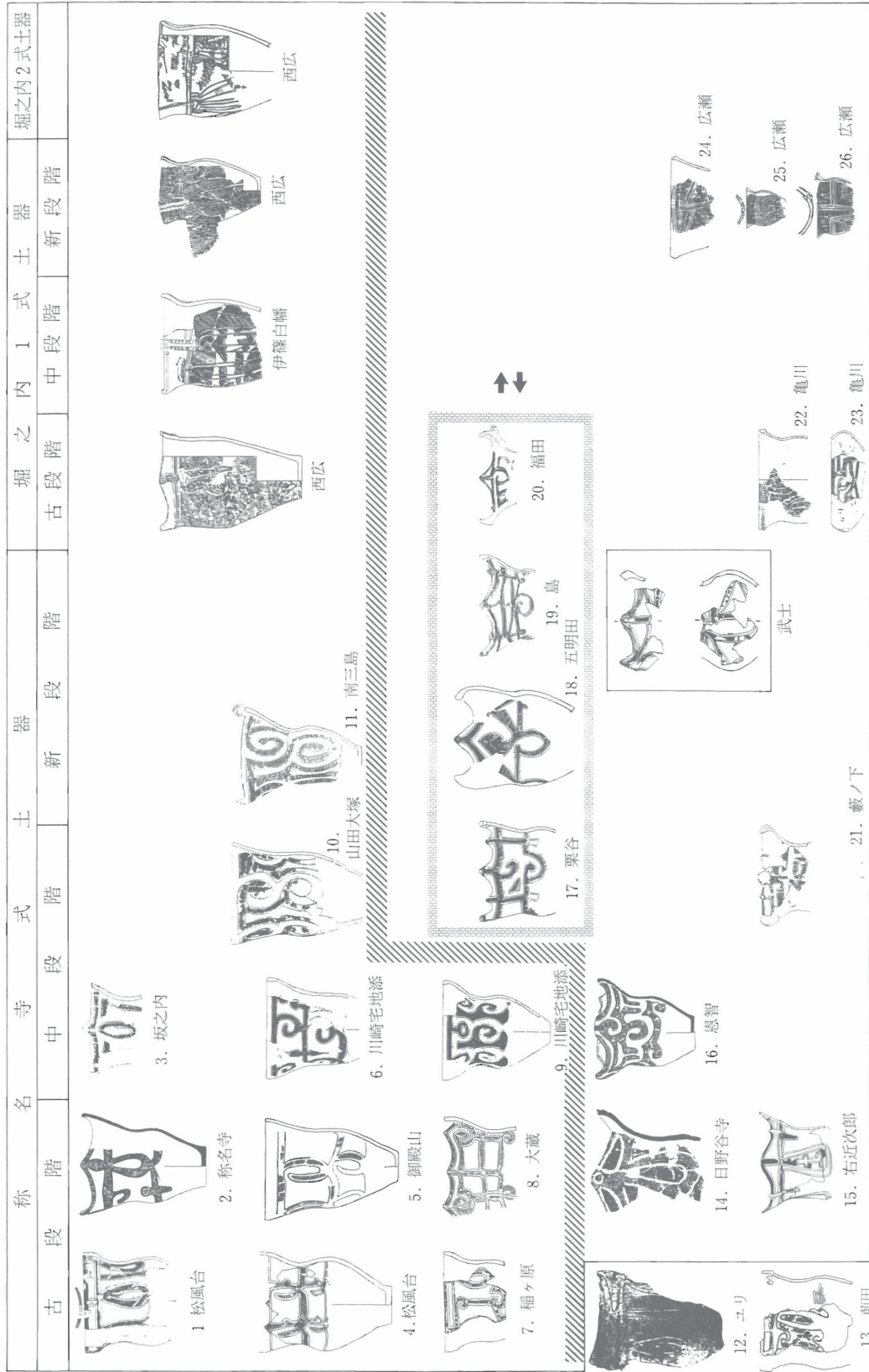
武士遺跡出土の中津式土器は、「2基の土坑から接合関係を有しながら出土」という一括性の高い状況から、今後の東西土器型式の編年学的序列を交差させる際の、重要な基軸としての性格を有している。今回はこの資料群の重要性に鑑み、東西の併行関係について、若干の考察を加えておきたい。

併行関係の把握に際しての、編年の基軸については、関東地方の称名寺式土器・堀之内1式土器の各段階変遷に求めることとした。称名寺式土器については、石井氏や鈴木氏によって示されたところの7段階区分(鈴木1990)(石井1992)をとる。中津式土器との詳細な対応が困難である点を鑑み、おおむね第1・2段階を称名寺式土器古段階、第3～5段階を中段階、第6・7段階を新段階とするが、この3区分は(石井1992)に準拠するものである。堀之内1式土器については(石井1993)に示された3大別/5細別段階のうちの3区分に準拠する。

なお、紙数の都合から、第5図に示した土器群の出典については概ね省略させていただく。

a. 称名寺式古段階=中津式古段階

称名寺式土器成立段階における、西日本系土器群の関与の詳細については、すでに鈴木氏(鈴木



第5図 武士遺跡出土関西系土器群の位置(縮尺不同)

1990) や石井氏 (石井1992) によって語られているので、重複は避けるが、第5図1・4・7に示した土器群が称名寺式土器古段階のなかでも古い部分に相当するものである。1は肥厚する口縁部内の窓枠状区画文、胴部は上下が連携された懸垂文(紡錘文)という構成をとるもので、文様構成としては12・13の系譜を引き、さらに14・15に類似するものである。称名寺式土器の成立をもって後期とする研究史的経緯を尊重する限りにおいては、1と13の比較が好例となる。すなわち、鈴木氏も注目するとおり(鈴木1991)、「縄紋後期になると一中期後半の磨消縄文では、縄紋の部分はマイナス、磨消された部分がプラスの部分であったが、後期の場合ではその反対になり、磨消しでない、磨残しの部分が紋様の主たる部分になる。」という、山内清男氏の大別を挟んだところでの様相の差異の把握(山内1961)が一つの基準となる。つまり、13の地縄文によって描出される胴部懸垂文(無文)は、口縁部文様帯下に明瞭に横位の区画文(沈線)を獲得することにより、口縁部/胴部の器形そのものでなされていたところの明瞭な区別が消失し、口縁部文様の縄文が胴部懸垂文内に必然的に獲得され、縄文部による胴部懸垂文が成立するという予測である。この観点に立脚するならば、12・13は中期(北白川C式4期)、14・15は後期(中津式古段階)ととらえるであろう。

1・2・3に示したながれは、一義的には、口縁部文様帯の器形上での平滑化と口縁部文様の形骸化である。この点から14・15は古段階の新しい部分に対応するものであり(14)、称名寺式土器古段階と中津式土器古段階が、近畿地方中期末の土器群の系譜を引く、類似性の高い土器群として、併行するものと思われる(15)。

b. 称名寺式中段階=中津式中段階

第5図3・6・9に示した土器群は、称名寺式土器中段階の古い部分に相当するものである。4から6へのながれは、施文域の垂下(拡大)・J字状文が施される施文域の上下の均等化等から語られるものである。6と共伴する9の理解は、大きな意味をもつこととなる。7から9に示したながれは、同一の系譜上にあるわけではないが、上下の渦巻文が縄文地と無文地で反転するもので、口縁部区画文の形骸化と縦位構成への変容から語ら

れるものである。称名寺式土器と中津式土器の中段階での並行関係を示唆する視点としては、この9と16の比較が好例であろう。16は12・14のながれにみられる口縁部区画文の様相を色濃く残すものの、渦巻文の上下反転手法をとるもので、9との時間的近接性をよく現している。また、口縁部区画文系譜の横位の帯縄文を残存させ、胴部下端での明瞭な横位区画文を残すことから、古段階にみられた、称名寺/中津式土器の文様構成法の類似性の高い関係から分離された直後のものとして、やはり、9との時間的近接性をよく現している。おおむね9と16は、称名寺/中津式土器中段階の古い部分の併行関係を示唆するものとして注目される(厳密には16のほうが若干後出的であろう)。と同時に、この段階から称名寺/中津式土器の分離がはじまっていることを示している。9は縦位の文様構成を強めながら、意匠末端を解放させる10のような土器群に変遷する。これに比べ、16の中津式土器は、口縁部部の帯縄文を省略し、より横位の連携を強めながら縄手遺跡例(原田1971・10頁第11図1)のような土器群に変遷していく(16)。ともあれ、称名寺式土器中段階での9から10、さらには11への、意匠末端の解放・縦位構成の強化、という変遷は、古い部分から新しい部分への変遷をおおむね物語っていると同時に、中津式土器における横位連携の強化も、称名寺式土器の動きに対比される変遷である可能性が強いと思われる。

この概併行関係の証左として、21が挙げられよう。21は、横位連携の完成した中津式土器中段階の新しい部分(もしくは若干後出的)に相当する個体に、称名寺式土器中段階の新しい部分に盛行する垂下隆帯が施されている。

c. 称名寺式新段階=中津式新段階

称名寺/中津式土器中段階の新しい部分からは、すでに称名寺式土器と中津式土器の分離が明瞭であり、型式学的に両者を結びつける根拠はきわめてとぼしい。この傾向は新段階ではより一層顕著である。

まさに、暗中模索の状況であるが、今回出土した武士遺跡の土坑一括資料は、両者の併行関係をとらえるに際しての軸となる性格を有している。つまり称名寺式土器第7段階(新段階の新しい部分)と中津式土器の新しい部分の併行関係の確認である。

前述したように、武士遺跡例に対比される島遺跡例(第5図19)は、かつて、中津式Ⅲ土器として福田K2式土器の前段階に位置づけられたものである。近年、鈴木氏によって、中国地方の資料を用いながら、中津式土器中段階(氏のいう「中位の部分」)から福田K2式土器への変遷が語られることとなった(鈴木1993)が、この変遷観と武士遺跡での状況から考えるならば、横位の整然とした連携が完成し、胴下半のJ字状文が反転した17が、おおむね縄手遺跡例(原田1971・10頁第11図1)の段階、つまり中段階の新しい部分に相当するとみるに大過なかるう。この17・栗谷遺跡例から19・島遺跡例(=武士遺跡例)にかけての変遷については、鈴木氏によって示されたとおり、18・五明田遺跡例のような土器群を介在させざるを得ないようであり、趨勢としては、武士遺跡例は中津式土器新段階の新しい部分に相当し、五明田遺跡例があてがわれる空隙部は、新段階の古い部分に相当する可能性が高かるう。無論、武士遺跡例の新段階への位置づけが可能であろうとも、土器群の変遷のながれから、概念化してとらえたまとめ(本稿でいう「段階」「部分」)が東西において、相同の時間幅を有していることが検証されない以上、より多くの一括資料の検出を待たねばならないと同時に、称名寺/中津式土器の新段階での併行関係や、内部での古/新部分の対応関係は、現段階では暫定的であるといわざるを得ない。

ともあれ、この称名寺/中津式土器の新段階での併行関係の証左としては、武士遺跡例以外にもいくつかの例が認められる。22・23に示した亀川遺跡例は北トレンチ北西部下層出土で、「出土状況にまとまりのあるもの」(植田1985)として報告されているものである。個体としてまとまって出土したのか、一緒にまとまって出土したのかは定かではないが、同一トレンチ・同一地点・同一層位出土の大形破片の出土という点から、おおむね一括性は高いと判断し得る(17)。22は称名寺式土器新段階の系譜上の土器であり、口縁端部文様帯が安定している点から、堀之内1式期古段階に下っている可能性の強いもので、共伴するであろう31の椀形土器は、鈴木も注目するように(鈴木1993)、洗谷貝塚で福田K2式土器と同一層位から出土している浅鉢形土器(小都1976・42頁第31図119)よりも、若干古相を呈しており、称名寺式期から堀

之内1式期にかけての段階が、中津式期から福田K2式期にかけての段階に、おおむね対応する可能性を示唆している。また、この椀形土器や浅鉢形土器はおそらく、福田K2式段階でも明瞭に3本沈線による意匠描出はなされないものの、近年筆者の管見に触れた津雲貝塚例(末永1929・78頁第33図)を参考にすると、中津式段階ではおおむね深鉢の胴部意匠と同様の変遷をとらえ得ることから、23についても細い帯縄文と、J字状文入り組み化からおおむね中津式土器終末段階を中心とする時期に位置づけられる。

d. 堀之内1式/福田K2式以降(予察)

前述のとおり、称名寺式土器と中津式土器がおおむね併行することから、今後は、堀之内1式土器と福田K2式土器の対応関係を検討しなければならない(18)。

近畿地方に絞って考えるならば、第5図24・25・26の広瀬遺跡土壇40出土土器群は良好な一括資料であり、その一括性の高さ、土器群の示す内容から「広瀬土壇40段階」として縁帯文土器成立段階に位置づけられているものである(千葉1987他)。この広瀬土壇40段階は、24に注目するならば、器形と施文域の胴部上半での集約から、堀之内1式土器新段階に位置づけることができよう(鈴木1993)。従来の福田K2式土器→(広瀬土壇40段階=縁帯文土器成立段階)→北白川上層式1期という編年観に準拠するならば、福田K2式土器はおおむね堀之内1式土器古段階・中段階に併行する可能性が高く、北白川上層式1期は堀之内2式土器との対応が考えられよう。しかし、縁帯文土器の定義にも深くかかわろうが、仏並遺跡71-O D出土土器群は、堀之内1式土器中段階を中心に、一部新段階のものを含む一括資料であり(岩崎1986)、「広瀬土壇40段階=縁帯文土器成立段階」以前に位置づけざるを得ない一括資料である。

仏並遺跡71-O D出土土器群が「広瀬土壇40段階=縁帯文土器成立段階」以前である以上、まず仏並遺跡例を縁帯文土器とよぶか否かの認識が整理されなければならない。そして福田K2式土器の成立・変遷が、短期間のうち(堀之内1式古段階に並行する段階)に収斂することが検証されない以上、近畿地方では、仏並遺跡71-O D出土土器群に示される段階に福田K2式土器が伴出する可能性を認めていかなければならないであろう。

5. おわりに

近年、堀之内貝塚（領塚1992）や菊間手永貝塚（近藤1993）において、福田K2式土器が各1片ずつながら検出されていることが公表された。武士遺跡においても、711・712号土坑以外にも、包含層をはじめとして、40片弱の関西系土器群（北白川C式～福田K2式）が出土しており、このなかには福田K2式土器に典型的な鉢形土器の口縁部破片も3片含まれている。武士遺跡における関西系土器群の検出が、武士遺跡の特殊性の一端を示すものであるのか、微量ではあるものの関東地方における普遍性の一端であるのか、今後の類例の検出を待ちたい。

謝辞

本稿を草するにあたって、特に関西系土器群の理解と編年学的位置づけに関しては鈴木徳雄氏より多くのご教示をいただいた。称名寺式土器・堀之内1式土器の変遷については、石井寛氏から日頃より多くのご教示いただいている。土坑出土の北関東／東北系土器群の理解に際しては稲村晃嗣氏より多くのご教示をいただいた。諸氏には日頃の学恩も含め、深く感謝する次第であります。

また下記の諸氏には、関西系土器群を実見していただき、多くのご教示を受けた。記して感謝の意とします。

（五十音順 敬称略）

泉拓良 植田文雄 川崎保 木下哲夫 工藤俊樹
高橋龍三郎 千葉豊 土肥孝 富井眞 西田泰民
穂積裕昌

註

1 ここでいう箱状把手とは、おおむね(泉1985)中の「深鉢C類」に伴うものを指している。ただしこの箱状把手について、多様な類型が存在することが認められるが、本稿の目的とは離れるので、省略する。

2 文献（谷本1970）35頁第10図79

3 文献（泉1989）24頁Fig14 911・299

この中実円筒突起においても、例えば第5図17例の突起正面の縦位の帯縄文部は、武士遺跡例の縦位円形竹管文に相当し、突起を囲うような横位の帯縄文部が、横位の沈線に対応する。

4 文献（泉1989）27頁Fig16 973

文献（谷岡1990）31頁挿図21 59

栗谷遺跡例については、縦位橋状（環状）突起と中空円筒状突起の融合・形骸化を示すものとして

興味深い。

5 文献（久保1983）27頁挿図15 164

文献（谷岡1989）29頁挿図21 42

厳密に（6）への変遷を追う意味では、時間的にこの2例は（6）よりも併行もしくは若干後出的である可能性もあり好例とはいええないが、良好な例がみあたらないのであえて提示することとした。

6 文献（柳浦1991）40頁第19図1・2・3

7 文献（網谷1992）65頁第18図6

8 武士遺跡出土の篋状突起に形態的に類似する例としては、

文献（小都1976）42頁第31図 123

文献（足立1987）125頁第3図1

文献（泉1989）32頁Fig21 366

文献（植田1990）70頁第55図844・60頁第45図535等が挙げられる。

ただし形態な類似性を認めつつも、突起に施される意匠や施文部位に多くのバラエティーが認められることから、武士遺跡例の系統的な位置づけを明確にし得ないでいる。

9 形態的に類似するものとしては、文献（中村1974）図版I 36などが挙げられようが、あいだを埋める資料にとぼしい。

10 突起両側面の帯縄文が端部へ抜けずに、閉じている様相も、解釈に苦しむところである。

11 このあたりの様相を明快に図示するのは困難であるが、中期末の箱状把手両側面の方形区画文系の意匠の帯縄文化、さらには、内折口縁と内折面に施される帯縄文が、やや内弯する肥厚系の口縁と口縁端部の帯縄文に変化する例としては、文献（岡崎1985）第二図と文献（間壁1967）10頁図71の対照が参考となる。口縁端部の帯縄文の省略化傾向は、本稿第5図16と文献（原田1971）10頁第11図1の対照が好例であろう。

12 武士遺跡の24・27のような突起に形態的に類似する例としては、文献（植田1990）44頁第29図57・101 79頁第64図1092等が挙げられる。これらについても、篋状突起同様に注意すべきである。

尚、西日本の当該期の突起の重要性と、変遷に関しては文献（鈴木1993）から多くの示唆を得ている。

13 口縁内屈部と帯縄文施文部の関係のみに注目するならば、武士遺跡例は、当該視点に着目した

千葉豊氏の論考(千葉1989))の「b種」に相当し、本例が福田K2式土器の新段階に相当することになってしまう。確かに、従来の中津式土器の新しい部分にみられる、ゆるやかに内弯・内折した口縁に比べると、武士遺跡の明瞭な口縁内屈部と内屈面の帯縄文には、異和感がただよう。また、千葉氏のいう口縁部断面形態の分類が、趨勢としての時間的傾斜を有することも首肯するが、鈴木氏も述べているとおり(鈴木1993)、今安楽寺遺跡での様相を鳥瞰する限りにおいては、瀬戸内・中国地方から近畿地方の広範囲にわたる後期前葉の土器群の、口縁部断面形態と帯縄文の施文域の差異に、時間的傾斜を優先的・網羅的に読みとることは、現段階では困難であろう。

先述のとおり武士遺跡例の口縁部断面形態を、箱状把手起源の、突起両側面を連携するような内折系口縁部形態の系譜としてとらえ得ない状況であるならば、まずなさなければならぬことは、中津式終末期の口縁部内折化の過程のなかから当該口縁部形態が生成してくる可能性の検討や、おそらく併行するであろう称名寺2式土器とのゆるやかな紐帯関係を前提とするならば、称名寺2式土器に一般的な、内屈する口縁部断面形態の関与も、当然検討していかなければならぬであろう。14 称名寺式土器の型式設定の基準資料は称名寺A貝塚出土資料が中心となっているが、今日の7段階区分の第1段階に相当する土器(吉田1960 12頁第十図1)が含まれており、近年の裏宿遺跡・稲ヶ原遺跡(平子他1992)等の第1段階の良好な資料群の検出をみても、山内清男氏の見解から導き出されるところの、“称名寺式土器の成立=後期の開始”という図式に、微調整の余地は残されてはいるものの、大きく変更される余地はない。対して、西日本後期初頭に位置づけられてきた中津式土器は、中津貝塚出土土器群が型式設定の基準資料となってきた。これらの土器群に福田貝塚出土の福田K1式土器を含めて考えても、今日の成果に照射させるならば、称名寺式土器中段階の新しい部分に相当する土器群が、量的には圧倒的主体を占めるものであり、称名寺式古段階に相当する土器群を中津式土器として明確に認識する必要がある(加納1986)。

15 口縁部区画文+胴部懸垂文構成をとる土器群は、関東において3のように中段階の古い部分に

まで下る例があり、西日本に関してもその下限を明確にとらえられているわけではない。今後の資料増加による部分が大きい、14の位置づけに関しては、中段階に下る可能性を有している。なお、この視点については、鈴木徳雄氏よりご教示を受けた。

もう一方の危惧すべき点としては、型式学的に中期末に位置づけ得る12・13の、後期に下る可能性を否定し得るかという点である。言い換えるならば、近畿地方中期末の有文精製土器のすべてが中津式土器的なるものに変遷するのかという疑問である。泉の示した大局的な深鉢の3類別にしたがえば(泉1985)、深鉢A類・C類は概ね中津式土器への変遷をとらえ得る。しかし、このA・C類のなかに見極め得る多様な類型が、すべて中津式土器的なるものに変遷するのではなく、おおむね中期後半で消滅する類型や、中期的な顔つきのまま後期に残存する類型を将来的に認識し得るのではないかという危惧であり、そこに地域的な消滅・残存の差異を付加させるならば、現段階での慎重な態度が必要であろう。

16 ここではあえて縄手遺跡例を図示しなかった。かつて当該土器を実見した際に、4単位ではなくおそらく5単位であった可能性が高く、個体上下の接合関係が不明瞭であることから、実測図から得るイメージは当該段階の様相をよく表現してはいるものの、引用することは躊躇せざるを得ないからである。完形の好例に恵まれないものの、実例としては、中津貝塚例(例えば、千葉1992・29頁図15)が挙げられよう。

17 北トレンチ北西部とは、住居跡を囲うように設定されたトレンチの狭い部分であろうと思われ、1m強×2m弱の範囲に相当しそうである。下層とは縄文晩期の溝にきられる層の可能性が高いのではなかろうか。なお、23の出土状況写真中には22を確認することはできない。

18 筆者は、福田K2式土器成立段階の定義については中国・瀬戸内地域での、3本沈線の獲得を目安にしている。従来より3本沈線による意匠描出を目安に福田K2式土器の認識がなされてきた研究史的経緯と、その認識が研究者間での共同主観であった経緯からみると、現段階で中津Ⅲ式土器を福田K2(Ⅱ)式土器へ編入することに素朴な疑問を感じる。植田氏の見解(植田1990)に全

面的に準拠する次第である。事細かな指摘は別の機会にゆずるが、例えば（横山1960）の船津原第1貝塚例（239頁004）には「主として福田K II式。中津式に近い磨消縄文があるので、福田K II式のなかでは古いものと考えられる。」との解説がある。また、津雲貝塚出土土器群（245頁030-h）には「福田K 2式」との解説（244頁h）がなされている。目録の例言に、内容の教示について山内清男氏の名前が挙げられているが、船津原第1貝塚例等を含め、教示に関して、個別の氏名の提示や、遺物例の指示は一切ない。明確な根拠がない以上、共同主観が優先されるべきと考える次第である。

引用・参考文献

- 足立克己 1987 「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」『東アジアの考古と歴史中』同朋社
- 網谷克彦 1992 『市港遺跡 北寺遺跡』三方町教育委員会
- 石井寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊（助横浜市ふるさと歴史財団）
- 石井寛 1993 「堀之内1式期土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡 華蔵台南遺跡』(助横浜市ふるさと歴史財団)
- 泉拓良 1985 「1、中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告』III
- 泉拓良・玉田芳英 1986 「文様帯系統論－縁帯文土器－」『季刊考古学』17
- 泉拓良 1989 『福田貝塚資料』奈良国立文化財研究所
- 稲村晃嗣 1989 「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群」『考古学の世界』慶應義塾大学民族考古学研究室
- 岩崎二郎 1986 『仏並遺跡』(助大阪府埋蔵文化財協会)
- 植田法彦 1985 『亀川遺跡V』海南市教育委員会
- 植田文雄 1990 『今安楽寺遺跡』能登川町教育委員会
- 岡崎雅雄 1985 『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 加納実 1986 「中津貝塚出土土器の抱える問題点」『研究連絡誌』第18号（助千葉県文化財センター）
- 久保穰次朗 1983 『島遺跡発掘調査報告書第1集』北条町教育委員会
- 小都隆 1976 『洗谷貝塚』福山市教育委員会
- 近藤敏 1993 「市原市内出土の非在地系土器」『市原市文化財センター研究紀要』II
- 末永雅雄 1929 『先史時代の瀬戸内海』日本交通公社広島支社
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄 1992 「縄紋後期注口土器の成立」『縄文時代』3 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式」『縄文時代』4 縄文時代文化研究会
- 谷岡陽一 1990 『栗谷遺跡発掘調査報告書』III 福部村教育委員会
- 谷岡陽一 1989 『栗谷遺跡発掘調査報告書』II 福部村教育委員会
- 谷本鋭次 1970 「東庄内A遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会
- 玉田芳英 1989 「中津・福田K II式土器様式」『縄文土器大観』4
- 千葉豊 1987 「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会
- 千葉豊 1989 「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』72-6
- 千葉豊 1992 「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会
- 中村徹也 1974 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』〔I〕
- 原田修 1971 『縄手遺跡』1 縄手遺跡調査会
- 平子順一他 1992 『稲ヶ原遺跡A地点』(助横浜市ふるさと歴史財団)
- 間壁忠彦 1967 「岡山県昭和町日羽ケンギョウダ(健行田)遺跡」『倉敷考古館研究集報』第3号
- 柳浦俊一 1991 『五明田遺跡』頼原町教育委員会
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会 1961提出 53頁参照
- 横山浩一 佐原真 1960 『考古学資料目録』1 京都大学文学部
- 吉田格 1960 「横浜市称名寺貝塚」『東京都武蔵野郷土館調査報告書』第一冊 武蔵野文化協会
- 領塚正浩 1992 『堀之内貝塚資料図譜』市立市川考古博物館